027
278
1

蓬雲出

027
278
1

愛知女専
第11864號
圖書

四一四

自題集
69811

序

東京法政大学

藤原文庫

東京法政大学に入る前の年の夏の
より帝国文学誌の二冊をもらしを用い
る雲乃きゝすゝいろ孫イ紫宮東小
ひのしいよゝ了のつぼさるきゝもゝ孫ぬ
より面白河梁上より紫ーー河きうひよ孫雪
の糸を孫やーーきゝ孫ハ昭文律水の再
奮なうん家よゝ詠の雄雄をたゝ

なくみすりよかへあつめて百題集と云
かなくしやゆ撰ばれるものあるべし

延享丁卯秋

武山百梅

春

あり京の新乃かのうしにある
よあ神代乃春はおもハれ
くへれ

早春

春きつや氷柱の雫はる雪より　希因
浦の春ちりも氷に咽るり梨　涼窠
大工ゑ見いりぬ春あり梅の香　〃

梅

梅咲は春よりもあや谷乃水　因
志つうさる庭きのそけも柳うれ　〃

柳

春霞きさすつくあるふやなきうふ　雲

雪

雪の日よりあるく居れば初雪の邪　宴

〜くひしやの実ばかりも菜ばかりもきへ　因

若菜

きのふはくおろしき野よりあるく菜なり　、

あるく

あるくやひなたに猫のさかりつく　宴

荒

荒れやすきを書すれば荒の風　、

かろ〜と山起このへばらすみからな　因

冬瓜

傍士の菜乃昼も焼るや菜の瓜　、

麻を書く片角にも〜表れる　宴

燕

志賀をいよ〜の見るぬや村つゞめ　因

搆

咲そ〜るあをとゝへば搆の風　宴

荷搆の花

ゆく丁や荷搆よ元新松のうへ　因

冷丁

かるふの雲にもゆるや丁の春　宴

ひゝろ孫乃すゝ〜へ孫ちんぐ　、

涅般

ねはん会や初ん〜もれ菜の二葉　因

おかろあの吹ちる新や表れ表　宴

表雪

御松の小松原ありはれの表　、

田螺

ちゝを来るあへ〳〵ゑく田螺うか　田

三日月の宵おろす田螺う郡　宴

やとふきやるの梅雨ふついて来れ　丶

山吹

山吹や陽く国ゑ井戸も明　田

堇

土橋〳〵堅を咲大中ゑ堇うれ　丶

楊〳〵ちろをおゆすもみれゞ　宴

雲雀

孫つれ竜へ枝つく竜落うち　丶

空ひろ〳〵空ほの山竜のひはうれ　田

楊

やま人ゑ和田やすーはつさ〳〵　丶

侵いおく本屋のゆゝや山ほ九〳〵　宴

蛙

夕月を宵中ゑ入せく蛙う郡　丶

蛙〳〵ゑと〳〵つむく舟下地ゑ　田

上巳

曲水や舟をちうれをさむ河　丶

塩釜をさく〳〵〳〵つ沢鮫うな　丶

桃

化粧田の垣ゑ沙〳〵〳〵桃ほ花　宴

雲ゑ似れゑゑも明もの茶　田

藤

同のちらひ人くし臭ふや藤乃花　紫

中〻に大木にもの有藤の花　同

蕨

大原にて
尼達の蕨よそろへ蕨かな　、

手を引て尼達ハ蕨かな　紫

暮春

ゆく時もれ行すし春の風　、

行はるや湖にうつる桜川　同

集

更衣

脱すしに花も取よくや衣更　同

茶色にぬりしや給やく給かな　、

麦秋

麦刈る音にあれや秋の風　紫

河骨

河骨の稚首もすしるかへ　同

夏菊

夏菊にれき雨と八江や春かこう　、

扇

祇園まて新八日億し扇かな　紫

五月雨

あきさ雨清水月日や五月雨　、

五月雨やあのすらてひやかれ　同

鯉　そ川鯉毎の一茎もしりぞく時　宴

蛍　苦丹よほしのびくさよ蛍かな　同

紫陽花　あちさいや新くゝ六新月新形　丶

桐も　遠山ゆく鶯見ぬやわ新菊　宴

瓜　口とのゝ来るむすめや初真瓜　丶

蓮　丈六ゝ仏ゝ蓮もあり蓮のむ　同

牡丹　蓮の葉ふくさにつむ牡丹かな　丶

芥子　葉はきりゝの無おもふに新芥子　宴

蝸牛　蝸の戸も雨を新角あり蝸牛　丶

蟬　仙人は蟬も日陽なり蟬乃あ　丶

郭公　おもし浪ゝ今も八古郭公なきに　同

さうもくよ徳さをよろこ

蓮　蓮もつゝひくかろやはゝ新浪　宴

推やたあく社杉戸くゝかこ

連歌会　蓮とろ新芥子ひゝくやくんたり　丶

茅花　茅の花は雪あよ似ゝ証のあ　同

ゝ乃茅のほ新新や月の欠れは　丶

仏生会

六の日より人を吾子や仏生会　宰

ゑハ新乃恋ほ〜けゑ仏生会　丶

乃ゑ咲ひ也通りやかきつはゝ　因

杜若

乃ゑ来ひゝ六ゝはの稽や杜若　宰

射樹

蕾の羽も沸芙ゑ吹や夏木立　因

糸子

糸乃子や蕃に添ふゑ乃やゝ　宰

風車

吹ゝ〜ゝ杯ゑ乃ゑぬやゝ風くるゑ　丶

糸のゑゑ蔓〜ちりけゝ風車　因

田独

独ゑのくゑゝ稲つ乃やゑ苗ゑ　丶

搭たちゝひゝりゝゝき彩ゑ因ゝゝ　宰

涼

仲の帆ゑ六ゝ乃走沸涼こゝ那　丶

彩坊に川あるこゝせゝすみゝゝ　因

夕鳥

夕ゝゝや雲のほゝりを雲ゝ咲　丶

ゆゝ彩や田舎八塚ゑトゆ雲　宰

雲雀

似せゝ乃ゝ笹拵山や雲のゝね　因

夕立

（波線ゑゝ）ゆゝ立や境の牛を水くるゑ　宰

百合花

豆ハかすゝ蓋あり百合の花　蕉

萩うけは枝ゝをすらるさゆらぐ　同

秋

七夕

立琴や星よむ指のひゝあれ　蕉

かはゝきやおのゝもやうハひゝつ稿　同

堊糸

袖は来ぬひま狩あハれ夕つゝ　〃

ゆふもをれ〳〵つけくゝはつる　蕉

稲妻

稲妻や山も森さちにあけくれ　同

いなつゝや角力乃国きつてゆく　蕉

月

弁様の風を掃きすゝきな　〃

月をれくちゝハあつく暮う郭　同

三日月

はねうけく萩志つまるや三日の月　〃

三日月や用を兄会すあきまろ水　蕉

女郎花

結紋乃隙やいろ〳〵をみふへ　〃

つゝしてハ先へ面ハれや女郎花　同

砧

松風もきくけは深るきぬたうち　同

ゆふくれの山を巻たむ砧の音　宗

籠賣て酒よ茶のへれお客うな　〃

鉢もれ森ちゝろのそくおさむる　〃

菊の香乃おもつく日や雲〳〵くれ　同

雲あ〳〵れ落よちら〳〵雪しくれ　宗

鶏以

茶屋

供樽の白をのぶくや鶏に毒　〃

休坊をみやけよちつまゝ哭る　同

葉

初秋

蛍

鶏頭

鶏頭や大立の碑水ぶくれ居る　〃

あさうかゝ葉はぶすりるよほみゝ　宗

はつ秋や月のくゝけあ是もぶし　〃

秋風や葉ハくハしくるる乃餐　同

居風ゝもお入るありきりす　〃

行燈よ家をたきりをきりくに　宗

寄すへる屋敷合作もみちちぶ　同

燈入乃ゝくもゝ寄ゝ表ぶ　〃

尾花

松風乃遠のきすゝき尾花かな　因

日のあしたあへるうぬ毛赤うれ　察

早稲

早稲の香やさ湯に吹たむ新酒ゆ　丶

菊

菊ちくや箒乃先のきれてゝ　因

俳句

俳句なる砌の交ゑつゝうち　丶

鶏

鶏星乃あをみかいゝ諸の郷　察

名月

名月ゑぱまゝくひくゝ栗の菴　丶

名月や日さへ見ぬくもすき　因

仮月

南風の俳乃緒窓ゝゝはの月　丶

きせ沙を見ふ月乃九ゝすゑ　察

落水

穂家の灯北陽きへゝゝ為水　丶

栗山子

初秋ゑ見あゝハや新叩ゝうな　因

麻

ふゝ森ゝ谷もも来ゝゝ麻のあ　丶

蚊帳

あ蚊を見ゝゝて居れえかゞ　察

蚊帳を見ても遠ちや秋のくれ　丶

言の秋

ゆく秋や一言消ゝ蕎麦乃花　因

冬

つくり木の糸も冴ゆれや初しぐれ　宋

薬一把牛よりふやそしぐれかな　同

木啄をたゞ一羽遠ふやそしの雪　宋

雪

ゆく春や山をも尾をあげてゆく　〃

かくれ家へ月の夜つくれたち薬ふ　〃

ちるさくら遅速ありける木のもとに　同

薬

枯野

枯野つすくおもあるハれく枯野かな　〃

あり吏きるちう道志れぬか枯野ぶ　宋

うゝ孫子火鉢乃雪うき宮うれ　〃

宮

出てやれ屋内の伺とれさむしうな　同

遠ゝ忌

遠ゝ忌や薬釜乃くゝも新法所　〃

遠ゝ忌や伺をすへくもうゝ同新　宋

水香

杉一番れ雪うひよ張す森新うれ　〃

門守れ便志つゝなり此の野　同

風

風や折きぬ柳よあもす、うゝ　宴

ふゝ――や芒ふき吹の水車　同

かつ〻花蘇もせぬ赤了苦の蕾　、

水の蕾ゆくらゝ見れをのへ了苦　宴

梟をうゝ仙よ入れ陰中う那　、

陰中

傾城よお――へ氷むつきんゞ　同

落ゝなる星ゞ舟乃大根引　、

大根引

い詩志ろ赤脛を伸るや大根引　宴

千鳥

風の実れいまたをみゆれ村千鳥　、

ひとりよも舟おゝ吹けや川ちゝり　同

水鳥ゆきゝうく落ふ中おう那　、

十夜

むらも彩よつゆくま十夜うれ　宴

納豆の蘇おハゝ蘇ゝ沖ゝき　、

沖和

おたへ乃柏子よきく飄うふ　同

古聖見れ卵う八ゆう添火焼ゞ　、

火焼

蘇ふろひてはふ――の老き火焼うふ　宴

今牡丹　やぼ牡丹をよりねハなりの梅　因

寄梅　春ゆゑぬ雪理もうつくし梅の花　宴

くちびるて手紙の一ぢやあ花も笠　丶

冬籠　初雪の降よいもりちらしあこ者　因

臨日　ゆくゆくやきゐハ孤舟の哀　丶

人の来ぬときを菴の作老ゆ　宴

延享五戊辰春　書林

江戸日本橋南二丁目
同浅草並木町　尹倉屋喜兵衛
京寺町二條上　江北源兵衛
井筒屋庄兵衛

# 目録

南北物語　前篇上下　涼代作
伊勢のはゝ　武山　雙亮
枯野問答　仝　百梅
百題集　仝　百梅
いせ物語　東武　李趨
梅路餘負　涼代作　連中
積之丈猿　東武杜中　一勺
立桐原
秋無　穂家のやとり　仝　林水　菱里
うゝやゝり　浮農菴　友琴

東武浅草並木町江北堂梓行